

⑥ 本学併設校である浪商高等学校への派遣計画立案と事例調査(その1)

本学の併設校で、キャンパスを共有する「浪商高等学校」を対象に、本学の運動クラブが、運動部活動に関与している事案であり、公立校ではなく、学校法人における一例としてとりあげる。

実施趣旨

同じ学園内の高校・大学が連携し、テニスにおける一貫した教育システム(スポーツ科学にもとづいたコーチングならびに活動環境)を提供すること。

ねらい

- ①スポーツ科学を身近に体験させ、興味を喚起すること
- ②国際大会で活躍するタレント発掘、選手の育成

本事業のポイント

大体大で得られた研究知見やトレーニング科学に基づいたトレーニング指導

主なサポート内容

体力測定、トレーニング指導、技術指導／指導頻度は隔週で週に1回(男女それぞれ月に2回ずつ指導)

技術及び戦術指導

- 技術および戦術指導:運動学、運動力学やコーチング研究から得た知識を活用し、エビデンスベースの技術指導を実践する。
- また、競技力の高い大学テニス選手と共に練習や試合形式練習をすることで質の高い技術力や戦術を経験させる。

トレーニング、傷害予防コンディショニング指導

- 基礎的な運動スキルや生理学的な運動機能を科学的根拠に基づいてトレーニングを実践する。
- 成長期のケガを配慮した傷害予防トレーニングやコンディショニングを指導。
中学、高校の生徒が、中長期的にテニスを続けられるようサポートをする。
- また、最新の測定機材を用いて体力測定を実施する。それぞれの身体的特性や体力レベルの現状を把握、個人の目標を立てトレーニングを実践する。

派遣先の情報

部員数:19名(3年生:男子3名、女子3名、2年生:男子4名、女子0名、1年生:男子6名、女子3名)

練習時間:(男子)練習曜日:月・火・木・金・土、平日は16:00~19:00、土曜日は13:30~17:00、休養日:水曜日、試合日:日曜日

(女子)練習曜日:月・火・水・金・土、平日は16:00~19:00、土曜日は13:30~17:00、休養日:木曜日、試合日:日曜日

顧問:男性、担当教科・英語、競技歴:8年、指導歴:15年、指導に係る保有資格:なし

大阪体育大学の体制

- 全体統括:スポーツ科学センター長・女子テニス部監督(体育学部教授)
- コーチング方法の監修・協力:本学男子テニス部監督(体育学部教授)
- トレーニング内容・体力測定項目の監修・協力:スポーツ科学センターS&C部会長(体育学部教授)、
スポーツ局サポートスタッフ(女子テニス部コーチ)
- 体力測定・トレーニング・技術指導:スポーツ局サポートスタッフ(女子テニス部コーチ)
- 体力測定・トレーニング・技術指導:女子テニス部(4名)

稼働実績

期間:2019年6月から開始

⑥ 本学併設校である浪商高等学校への派遣計画立案と事例調査(その2)

調査結果

同じ学園内の高校・大学が連携し、テニスにおける一貫した教育システム(スポーツ科学にもとづいたコーチングならびに活動環境)を提供すること。

生徒へのインタビューのまとめ

① 大学生が指導に来てくれると聞いてどのように思いましたか。

「大学生が来てくれた時が嬉しかった」「少しでも上達しようと思った」「いつもと違う練習の空気感の中でできると感じた」など期待感があるコメントが多かった。

② 実際に大学生から指導を受けてどのように思いましたか。

「年齢も近く、質問もし易かった」「分からないところを丁寧に教えてくれて嬉しかった」「丁寧な指導をしてくれた」「分かり易い指導をしてくれた」など、①と同じく、全般的に好感的であった。

③ 大学生の指導を受けてあなたの技能はどのように変わりましたか。

今までできない技術の習得や、それに伴う自身生まれたり、種目の専門技術を大学生から学び、それによる自身の技術向上を体感している生徒が多かった。

④ 大学生の指導を受けてあなたの体力はどのように変わりましたか。

「体の使い方が巧くなった」「これまでできない動きができるようになった」など、向上を感じる生徒も多い一方で、「変化はない」「わからない」「変わらない」などとコメントする生徒もいた。

⑤ 大学生の指導を受けてあなたの生活態度はどのように変わりましたか。

「テニスのことを考える時間が増えた」「(学生と話をする機会が増えて)会話の言葉遣いを注意するようになった」「様々な角度から物事を考えるようになった」など自身の日常生活の変化を感じる生徒が多数いた。

⑥ 顧問の先生と大学生と2人体制の指導についてどのように思いますか。プラス面とマイナス面の両方をお話してください。

「相談できる相手が増えた」「プレーを捉える視点が増えた」「多くのアドバイスももらえるようになった」などプラス面を生徒は多く回答し、「マイナス面はない」と応える一方で、「アドバイスの内容が異なる」「アドバイスが増える分、その両者を実現することが難しい」とマイナス面を指摘する声もあった。

顧問へのインタビュー

① 本学の学生を受け入れてくださったのですが、本学学生の指導に関してどのように思われましたか。

- トレーニングについては定期的に行っていただき、非常に専門的に分析し取り組んでいただき、有り難く思い感謝しております。ただ自分たちの練習の中で、来ていただいていないときに、メニューに取り組ませるのが難しい所もありました。
- 定期的に測定をしていただいてフィードバックをしていただきました。最初はランキングに一喜一憂していた生徒たちでしたが、2回目はどこの分野が勝った負けたと話をしていたので意識が変化してきていることを実感できました。
- コーチング実習として今年度は2名、お受けいたしました。1名は本校テニス部卒業生、1名は他校出身者でした。両名とも非常に良く頑張ってくれました。また同じ敷地であっても触れ合うことない、うまい大学生に教えてもらったり、ヒッティングしてもらい、生徒たちも満足していたので、継続していけたらと思っております。

② 本学の学生を受け入れてくださり、先生の業務にどのような影響がありましたか。

- 生徒たちの現状は、副顧問の先生がコートにいてくれても正直引き締まらない雰囲気があるので、主顧問としてコートにスタートからいることを意識して受け入れをさせて頂きました。なので、やはりクラブ以外の仕事がクラブ以降となることが多く、やはり業務を圧迫していたのは正直なところですが、ただ、私自身も学ぶことが多く、大学生と話す機会もないので、テニスの話や就職の話など、いろんな話題を共有できたことは有意義であったので、業務が後に行くことを苦には思いませんでした。本当に貴重な時間を作っていただけたと感謝しています。

⑥ 本学併設校である浪商高等学校への派遣計画立案と事例調査(その3)

③ 現在、(国内の公立校中心に、)運動部において部活動指導員を導入する動きがあります。これについてどのようなご意見をお持ちですか。

- 非常に良い制度だと思います。専門の方に指導していただけることは非常に生徒にとってもプラスに動くと考えています。
- 一方で、やはり部活動の位置付けが学校内でどのようにされているかが重要なところだと思います。私は生徒たちには常日頃、「クラブ活動は学校教育の一貫」ということを伝えていきます。「プレーだけうまくなりたいたら、クラブを辞めてスクールに行きなさい」とも伝えていきます。教育の場なので我慢することや上下関係の構築なども部活動から学ぶべきことだと、古い考えかもしれませんが思っています。なので、教育の一貫である部活動を指導していると理解を持って指導してくれる外部指導員であれば本当にいい制度になると考えています。

④ 外部の指導者がトラブルなく行うためにはどのような工夫が必要だと思われますか。

- ③でもお答えしましたが、「学校教育の一貫」であることから、顧問の先生とも密に連携を取り、先生のクラブ運営方針を理解している外部指導者を育成していくことが必要だと思います。
- いろんな考えをお持ちの指導者もたくさんいると思いますが、高校のテニス部だけで考えるとやはり他校の事例を見てもトラブルが非常に多く、数年で人が変わる現状があります。「指導方針」「生徒募集」「お金」などいろんなことが絡むと思います。やっぱり結局のところ、「学校＝顧問の先生」とコミュニケーションをしっかりと取れるかだと思います。お互いに頼っているだけになってしまうことがトラブルの原因となると考えています。
- 「顧問は部活動に行く時間を他の仕事に使える＝外部指導者が自由に指導を行うがスポーツ以外の指導はしない」というのは、うまくいっている間はいいと思いますが、生徒や保護者とトラブルになれば、外部指導者は「顧問の先生が処理してください」ってなることが多々ある。こうなることを避けるためには、顧問の先生もある程度、指導の場に立ち会っていることが必要になります。
- なので、本当の意味での教員の仕事を減らすための措置かもしれませんが、なかなかそうはいかないのが部活動指導ではないかと思います。欧米のように保護者の意識も勉強は学校の先生、課外活動は外部指導員という構造ができていればいいのですが、日本の保護者の意識は、部活動でなかれば学校という考え方は変わっていませんので、なかなか制度としては成熟しないのではないかと正直思っています。

まとめ

- 本学のスポーツ科学センターのS&C部門、AT部門、心理部門などからも協力を仰ぎ、包括的なサポート体制を構築する。
- 関与やサポートの内容、ボリュームなど、高校と大学側で密に協議を行い、事前決定、好例になるよう報告・連携体制を確立し実績を残す。
- 対象者の満足度や体力要素、スキルパフォーマンスなどを収集・蓄積をさらに進め、分析を行い、そのデータを活用し、研究発表を行う。
- 高校、大学の関係者を集め、「情報交換会兼報告会」の定期開催を、次年度以降は計画する。
- トレーニングやリハビリテーション、メンタルトレーニングについての講義を高校生やサポートする大学生にもレクチャーする。
- 本事業に関係する高大の教職員を対象に運営委員会も開催する。